

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 28 日現在

機関番号：34511

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2016

課題番号：23531094

研究課題名(和文) 幼保一体化に向けた保育カリキュラム・モデルの構築

研究課題名(英文) Construction of a nursery curriculum model to integrate childcare

研究代表者

大橋 喜美子 (OHASHI, Kimiko)

神戸女子大学・文学部・教授

研究者番号：10353020

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は幼保一体化(幼は幼稚園、保は保育所)に向けて既存の保育施設の子どもの真の育ちを考えた保育カリキュラム・モデルの構築について検討した。基礎研究として幼保の保育者(幼保共に保育者とする)に実施したアンケート調査では、6項目中5項目に幼保の保育者間で有意差があった。有意差がみられた項目のうち「保育の計画と理解」に着目した結果、差異の1要因が「環境」であり、保育カリキュラムと環境と子どもの育ちの関係性を改めて検証する必要性が認められた。資料として幼保一体化を進め環境保育を実施している自己肯定感の育ちを基本としたデンマークの保育カリキュラムと環境について着目、実地調査を行い示唆に富む結果を得た。

研究成果の概要(英文)：In this study, we investigated establishment of a curriculum model that promotes true growth of children in childcare facilities, with the goal of integration of kindergartens and nursery schools. A questionnaire was distributed to childcare providers in kindergartens and nurseries. The answers from respondents in kindergartens showed significant differences for 5 out of 6 questions, and among these items we focused on “planning and understanding of child nursing”. This analysis showed that one of the causes of the different answers was “environment”. This result suggested the need to investigate relationships among “nursing curriculum” “environment” and “child growth” from a new perspective. We then conducted field work to examine child nursing and the environment in Denmark, where integration of kindergartens and nurseries is promoted and environmental nursing is implemented for nurturing of children’s self-esteem. We were able to obtain meaningful results from this field work.

研究分野：教育学(乳幼児保育)

キーワード：幼保一体化 保育カリキュラム 保育の計画 保育環境 デンマークの保育 自己肯定感 保育の質

1. 研究開始当初の背景

2010年当初、日本における乳幼児教育は待機児童の増加や子育て支援、児童虐待等の問題など子どもを巡る課題が山積していた。中でも児童虐待においては、児童相談所に寄せられる相談の対応件数は年々増加の一途をたどり、そうした状況の中で保育所や幼稚園、認定こども園等における専門機関の果たす役割は大きいと考えられた。それらの問題に対して、政府は国家的政策として「子ども子育て新システムの基本制度案要綱(2010)」を策定し、幼保一体化に向けて幼保の機能拡大を明確にした。しかし、保育現場では、今後の幼保一体化を含む具体的な保育動向の変化に戸惑う声も多く、保育所や幼稚園、認定こども園等における保育者間の保育観や保育内容・方法等の差異には看過できないものがあった。そうした現状から、新たな保育カリキュラム・モデルを示すための基礎研究として、幼保の保育観の差異を確認し、調整することから研究を進めることが不可欠であると考えた。(以降、幼は「幼稚園」、保は「保育所(園)」を示す。幼稚園教諭・保育士は保育者とする。以下同様の表記とする。アンケート項目は原文のままとした。なお、認定こども園は回答が少数のため除外した。)

2. 研究の目的

国の保育施策としての幼保一体化の推進がされる中、日本の子どもがどの施設においても平等で生活しやすい保育を受けることが出来るよう、既存の保育施設の枠を見直し、子どもの真の育ちを見すえた幼保一体化に資するための礎石となる基礎研究を行い、同時にデンマークの保育に学びながら「幼保一体化に向けた保育カリキュラム・モデルの構築」をめざすことを目的とした。

3. 研究の方法

(1) アンケート調査の実施

① 幼保保育者の保育観の差異

設問は、保育の計画性(6項目の内容と37の細目)、保育の在り方、子どもの対応(4項目の内容と52の細目)、保育者としての資質や能力・良識・適性(3項目の内容と31の細目)、保護者への対応(5項目の内容と19の細目)、地域の自然や社会とのかかわり(3項目の内容と9の細目)、研修と研究(7項目の内容と39の細目)を作成。設問項目は「幼稚園における学校評価(財全日本私立幼稚園幼児教育研究機構・編著2009)」を参考に作成した。配布数490 回収467 回収率95%(小数点以下四捨五入)のうち、欠損値を除いた356名(幼稚園=154、保育園=202)のデータを用い、因子間の相関を求めめるために、斜交回転のプロマックス法を適用、因子寄与の低い観測変数を除外しながら因子抽出を行った。

② 自由記述による保育観の差異

2名の研究者によって妥当性を確認しながら自由記述の内容をキーワード化し、コーディングを重ねて8項目を生成して幼保の保育者の保育観に関する傾向をみた。カテゴリ内容は「子どもの幼保における生活全般および保育内容・方法等に関する事項(表1.

(1)」「法的な幼保の制度や機能、役割等に関する事項(表1. (2)」「親・母親・保護者に関する事項(表1. (3)」「幼保の保育内容や運営に関する特徴的な事項(表1.

(4)」「子どもの発達や内面等に関する事項(表1. (5)」「～の感じのような感覚的・情緒的な表現である事項(表1. (6)」「施設・設備に関する事項(表1. (7)」「すべてのカテゴリに関する課題(表1. (8)」である。

表1. 幼保の保育者相互間の差異(数字:N)

カテゴリ内容	幼⇒保	保⇒幼
(1) 保育・生活について	165	269
(2) 制度・機能・役割	173	229
(3) 保護者	76	55
(4) システム	40	27
(5) 子どもについて	26	23
(6) 雰囲気	55	56
(7) 施設・設備	3	8
(8) 課題	18	2

最も回答が多かった「子どもの幼保における生活全般および保育内容・方法等に関する事項（表1.（1）」「法的な幼保の制度や機能、役割等に関する事項（表1.（2）」とした2項目に着目した。なお、一つの自由記述に複数の項目が存在した場合は、それぞれの項目に含めた。

(2) 幼保実践映像視聴による保育観の分析

保育実践場面の対象は5歳児クラスとした。はじめに幼保の実践記録映像収録と実践者への保育計画などに関するインタビュー調査を実施した。次に保育実践映像記録施設が特定できないように配慮し、関係者以外の保育者に視聴を依頼した。その第三者の保育者による映像視聴と感想を収録、視聴時の逐語録から、幼保保育者間の保育観差異を求め分析を行った。逐語録は保育所保育指針、幼稚園教育要領、子ども子育て関連3法を参考に一度でも会話が出現した言葉を13項目にカテゴリー化し、会話の出現が多かった上位4項目までの「保育の質と専門性に関して」「個人および集団の発達や成長など」「自らかかわる環境」「室内の環境構成」を分析の対象とした。

(3) 幼保保育者の相互理解に向けて総合保育園の環境とカリキュラムからの学び

幼保における保育者間の保育観や保育内容・方法等の差異は看過できないとして研究を進める中で、幼保保育者の保育観の差異が明らかとなった。そこで、幼保の今後の課題を再度問い直す中で「子どもの育ち」に必要な根幹は自己肯定感（デンマークの人は自己尊重感と訳すことがある。）の育ちであり、そうした育ちを見すえたカリキュラムを立案することが幼保一体化を目指す日本の保育に急務であると考えられた。

幼保保育者の相互理解に向けて、公的に幼保一体化で運営されているデンマークの総

合保育園の保育方針や保育観について注目した。そして、現地における保育観察と共に資料収集を実施した。

（視察先）

フラーヤースヘブン総合保育園（2014年10月7日）・森の幼稚園（2014年10月9日）・ボョーネガーデンイオレロップ保育園（2014年10月10日）・パピロン総合保育園（2016年8月15日）・キレヴェンゲット総合保育園（2016年8月16日・8月17日）

4. 研究成果

(1) アンケート調査の実施

① 幼保保育者の保育観の差異

因子抽出の結果、「保育の計画と理解」「保護者支援と対応」「研修と研究」の3つの因子について妥当な解釈が可能な潜在変数（因子）を得ることができた。ここでは「保育の計画と理解」に着目した。その細目である「幼稚園・保育所（園）の保育理念・保育方針を理解している」「幼稚園・保育所（園）の保育方針に共感している」「幼稚園・保育所（園）の方針、所（園）長の考えについて所（園）長や職員と話し合っている」「幼稚園・保育所（園）の目指す子どもの姿を具体的にイメージできる」において保の保育者よりも幼の保育者に有意差がみられた（ $p < 0.001$ ）。また、「幼稚園教育要領・保育所保育指針は所（園）長や職員と話し合っていたりする中で子どもの姿や環境の構成、保育者との関わりについて具体的にイメージができるか」の問いにおいても幼の保育者が保の保育者との間で有意差がみられた（ $p < 0.001$ ）。「教育課程・保育課程の編成」も同様の結果であった。

差異がみられなかった細目は、「幼稚園教育要領・保育所保育指針について所（園）長や職員と話し合っている」（ $p = 0.256$ ）。「長期の保育の計画はマンネリ化しないよう常に見直しを行ない子どもの実態や周囲の状況の変化に対応できるように作成している」

($p=0.130$)。「保育の計画は総合的な活動ができるように考慮して作成している」($p=0.418$)「子どもの生活が豊かになるような行事を子どもの実態に合わせて精選している」($p=0.379$)であった。その後、差異の要因として「環境」と関連があると仮説を立て共分散構造分析を行った結果、「保育の計画と理解」と「環境」はパス係数0.78でありプラスに影響していることが、明らかとなった。保育者の「保育の計画と理解」は「環境」と関連があり、幼の保育者は保の保育者より「保育の計画と理解」が高い傾向にあった。

②自由記述による保育観の差異

「保育・生活について」の幼の保育者からみた保のイメージは、「養護の力が強い場」「自由でのびのびした時間で遊んでいる」「養護および教育の場」「基本的な生活習慣を確立する場」などが記述された。保の保育者からみた幼のイメージは「就学への準備」「教育中心の場」「保育内容に工夫が見られない」「一斉保育」「時間が短い」「保育への配慮が弱い」などとされ記述内容から養護と教育が対立的に捉えた傾向が伺えた。

「制度・機能・役割について」では、幼の保育者からみた保は、「親に代わって子どもを育てる場」「福祉的な場」「生活を助ける場」などが記述されており、保の保育者からみた幼は、「小学校との連携が密である」「地域によっては守られ大切にされている」「文部科学省の管轄のため教育的なイメージである」「就学前教育であること」などが記述され、保の機能に教育が含まれていないとも受け取れる記述があり、ここでも幼保の保育観に差異がみられた。

(2) 幼保実践映像視聴による保育観の分析

自らかかわる環境について、「保の保育者から見た幼の実践」では、コーナーの教材整

備、制作中の室内が整理整頓されていることへの保との比較、「幼の保育者から見た保」は、壁面装飾の位置、保育室の広さや集団の人数が注目された。子どもが自ら関わる環境とは何か、子ども自身が作り出す環境と保育計画による環境の整合性について、子どもの育ちを基とした議論がされた。

指導案解読後の感想は、保育のねらいや実践と指導案の整合性、記述様式などが話し合われ、「楽しむことに対する環境構成の材料を分けて置いてあるけれど、工夫して作る場所に、きっと子どものいろんな思いがあると思うけど、その記述は?」「保育者のかかわりが簡単にまとめられている、丁寧さが必要」など、記述の方法や内容が子どもの育ちに与える意義について語られた。また、視聴中の幼保の保育者共に、保育者の言葉遣い、教材準備、導入と保育展開、その流れと指導案の関係など、相互の保育を見てこれまでの自分の保育を振り返ることも語られ、幼への評価が高く保育の質の充実がみられるとの感想があった。ここでは、Research (保育観・教育観) Plan (保育計画・教育計画) Do (実践) Check (分析・評価) Action (工夫・修正) の視点で評価がなされ、子どもの発達、環境と保育実践、保育指導計画などを総合的にみて保育の質や専門性が議論された。

(3) 総合保育園の保育環境とカリキュラム

幼保の保育者間の保育観や保育内容・方法等の差異は基礎研究の中で明らかとなった。

デンマークの総合保育園での資料は、訪問園(森の幼稚園を除く)が存在する市が作成している指針を提供された。自己肯定感の育ちを重視している保育の基本である「学びのプラン(日本の保育所保育指針のような指針)」が出されている。それを受けて、各市では具体的な学びのプランが検討されている。

リュングビューー・トーベック (Lyngby

Taarbek) 市においても市の教育方針として、アクティブ・ラーニングを保育の基本としてあげ、より質の高い保育ができることを大切にしている。「学びは子どもたちが意味のある活動をしていること、子どもたちがハイクオリティの学びをすることは日常の些細な関わり合いの中で意欲が生まれ、学びは一人一人の子どもに意味のある活動である」として、学びの基礎として花の形で保育者に理解しやすい表現がされている(図1)。

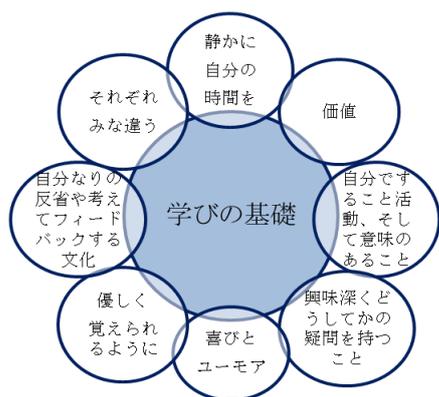


図1. ラーニングの花 (大橋一部改編)

保育環境の具体例では、園庭は、乳児のブランコなどは安全面に配慮がされており、子ども同士、大人と子どものコミュニケーションがとりやすい構造が工夫された環境が整えられており、園庭の保育環境に導入したい点である。



人的環境では、どのような環境の条件下においても子どもを他者と比較することなく、子ども自身の過去と比較することによって、自己肯定感が育つとしている。保育者からの関わりである人的環境は、どの地域においても実践に結ぶことができる。これからの点も

保育カリキュラム構築の配慮として再度検討をしていきたい。

(4) 幼保一体化と研究成果の意義

基礎研究では、幼と保の保育者による保育観の差異が明らかとなった。結果では、「〇〇において職員と園長と話し合い▼▼」など、園全体で話し合うとされた設問への答えでは幼保間の保育者において幼の保育者に有意差がみられた。保の保育者が有意だったのは「子育て支援」だった。

幼の保育者と保の保育者間において見えてきた保育観の差異は、日本がこれまで築いてきた乳幼児保育の歴史の中で幼は教育で大人側からの一方的な知識を与えることであり、保育は子守に近い営みであるといった保育観が一部に残存していたことも考えられる。ここに幼保一体化の課題があり、今後整理が必要である。

2018年4月1日に告示された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、子どもの育ちに大切なこととして「生きる力」をあげている。そして、生きる力の基礎を育むため、保育の基本を踏まえて3つの能力を一体的に育むように「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力の基礎」「学びに向かう力、人間性等」があげられている。さらに幼児期の終わりまでに育ってほしい力として10項目を示している。それらを解釈すると総合的には自己肯定感の育ちに繋がると解釈できる。

デンマークにおける自己肯定感を育てる保育の資料は貴重であり、自己肯定感の育ちと保育カリキュラム、および人的環境と物的環境について示唆に富む資料を得た。

リュングビュー・トーベック (Lyngby Taarbek) 市の学びの基礎では「日常の些細な関わり合いの中で意欲が生まれ…」とある。

金子ら¹⁾(2003)によれば保の「生活体験」は「保育の基盤であり、重要な要素である。

子どもの生活を意識的に豊かにし、その中に意味や教育的価値を見いだしていくことが「保育」であるとしている。

保育カリキュラム・モデル構築の基本は、日常生活の関わり合いの中で生まれる子どもの姿に教育的価値を見出していくことである。そうした日々の生活が結果として子どもの自己肯定感の育ちを豊かにしていくこととなるのではないだろうか。

本研究において明らかとなった幼保保育者の保育観の差異は、幼保一体化に向けて、日本のすべての保育者が研究者と共に子どもの生活体験を基盤とした教育的価値の実践的研究を進めることが課題として明確になった。そうした研究を進める中で幼保の相互理解がなされ、日本のすべての子どもに質の高い保育が提供されるための保育カリキュラムが構築されることが考えられる。

本研究は今後の課題を含みつつ、幼保一体化に向けた保育カリキュラム構築の一助になると考えている^註。

(引用文献)

i 金子 恵美, 森上 史朗, 増田 まゆみ「保育所と幼稚園の合同保育に関する研究」 日本保育学会大会発表論文集 (56) 690-691, 2003

(注)

カリキュラムのサンプルは0歳児、1歳児、2歳児を対象として、「0・1・2歳児の保育の中にみる教育—子どもの感性と意欲を育てる環境作り—」(pp. 91-98, pp. 103-117)に示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

- ①大橋喜美子、子ども・子育て新制度における保育の質と課題 立命館大学産社論集第51巻第1号(通巻165号)、pp. 101-113、2015、査読有
- ②大橋喜美子、三宅茂夫、幼保一体化における保育の計画・質に関する研究—幼稚園・保

育所(園)の保育者の差異に着目して—、神戸女子大学文学部紀要第49巻、pp. 65-77、2016、査読有

③今福理博、明和政子、大橋喜美子、大人の発話スタイルが乳児の顔注視行動に与える影響:歌いかけ (Infant-Directed Singing) に着目して、日本音声学会「音声研究 20」、pp. 48-57、2016、査読有

〔学会発表〕(計6件)

①大橋喜美子、三宅茂夫、幼稚園・保育所の一体化と保育の質に関する研究、2011年5月21日、玉川大学(東京都町田市)、日本保育学会第64回大会ポスター発表

②大橋喜美子、三宅茂夫、保育士・幼稚園教諭からみた保育所・教育園のイメージと計画性、2012年5月4日、東京家政大学(東京都板橋区)、日本保育学会第65回大会

③大橋喜美子、三宅茂夫、幼稚園・保育所(園)の一体化と保育の質に関する研究(4)—保育実践から見る幼保間相互の差異に関する分析—、2014年5月18日、大阪総合保育大学(大阪府大阪市)、日本保育学会第67回大会

④大橋喜美子、今福理博、明和政子、乳児は絵本読み聞かせ場面で何を学んでいるのか、2014年6月21日、日本女子大学(神奈川県川崎市)、日本赤ちゃん学会第14回学術集会

⑤大橋喜美子、幼稚園・保育所の一体化と保育の質に関する研究(3)—相互のイメージに関する自由記述と保育の基盤となる事項との分析—、2015年5月11日、中村学園大学(福岡県福岡市)、日本保育学会第66回大会

⑥大橋喜美子、幼保一体化と自己尊重感を育てる保育カリキュラム—デンマークの保育実践からの考察—、2016年6月5日、琉球大学(沖縄県中頭郡)、日本子ども社会学会第23回大会

〔図書〕(計1件)

①大橋喜美子、0・1・2歳児の保育の中にみる教育—子どもの感性と意欲を育てる環境作り—、全131頁、(株)北大路書房 2017

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大橋 喜美子 (OHASHI, Kimiko)
神戸女子大学・文学部・教授
研究者番号: 10353020

(2) 研究分担者

三宅 茂夫 (MIYAKE, Shigeo)
神戸女子大学・文学部・教授
研究者番号: 10369738

(3) なし

(4) 研究協力者

大野 睦子 (OHNO, Mutsuko)